
ブローケン・スプリング

星空の闇に消えた男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブローケン・スプリング

【Nコード】

N2690F

【作者名】

星空の闇に消えた男

【あらすじ】

華やかと見えた大学生活に自らの光を見出だせず、途中で辞めて県外へと飛び出てしまった由希。そこで出会った自堕落な男といつのまにか恋に落ち、甘く楽しい時間が過ぎてゆくように思えたのだが…

「よいしょと」

由希は荷物をあくせくとまとめあげていた。チンピラの早次郎と二年半の苦く堪えるに堪えかねない生活を過ごしてきて、やっと昨夜一晩だけ過ごして別れた今日になっても穢れた心の垢がこびりついて取れない。

「元気でな。たまには俺のこと思い出せよ」

早次郎が別れ際に吐き捨てていった言葉。身も心も疲れ果てたわたしには、なぜか頼もしくも聞こえたのであった。半年前、中学まで同じクラスメイトだった俊也と何とはなしに偶然出会う機会があり、由希は彼の下へゆくことになったのであった。

特別、青春時代彼女は俊也のことは気にもせずに過ごしてきた。

箱入り娘のように育てられた彼女は、男女間の恋というものに敏感なほうではなかったのかもしれない。世間からは花やかに見られているであろう私立の女子高に入学してからは吹奏楽部に入り、陽が落ちる頃までトランペットとともに汗を流す毎日であった。

「一緒に帰ろうよ、由希イ」

「わたし、此処のパートもう少し練習してから帰る」

「えー、じゃあ、あたしも残ろうかなあ」

それでも過ぎ去った日々は充実していた。

そして、月日はいつの間にか由希をしとやかな女子大生へと連れていった。ここでも周りは同性の女の子ばかりであったが、もうすでに高校時代から慣れっこであって特別気にも留めなかった。あれこれ整理している段ボールの中から、その時の写真が数枚ふいに転げ落ちてきた。由希はそれを空ろな眼で、少しの間じつと見つめた。

「どうして私は今、こんなところにいるんだろう。こんなにあくせくと荷物を整理したりしているんだろう。何があってあんなチン

ピラの男なんかと絡むハメになってしまったんだろう」 部屋の薄暗い電灯の中で、彼女は写真の中の今のどん底に近い境遇とは正反對にいるもう一人の自分を悲しげに見つめる。

「悔しい……」

由希は小さな溜息に混じって顔をさらにうつむけた。自然とあの頃の追憶が泪とともに込み上げてくる。

「由希イ、明日の土曜、部活休みだしどっか遊びに行かない？」

「うん、いいよ。どこ行こうか」

「シヨッピングした後、ご飯食べに行こうよ。美味しい店知ってるんだ、わたし」

「うん、いいね。そうしよう」

無邪気にただただ毎日が訳もなく楽しくて、友達と微笑^{えみ}を交わし合つてい高校生というまだ“幼き”頃の自分。途中の旋律^{メロディ}でどうしてもつまずいて、ムキになりながらも何回もトランペットを弾いていたあの“幼き”表情。

もうあれから六、七年は経つのに、まるで手で取り戻せる昨日の出来事のように、あどけない表情^{かお}のフィルムが由希の脳裏に焼き付いてきた。

（あそこで止めてさえいなければ）

と、同時にブラックコーヒーを恐る恐る興味半分で飲んで味わったような苦いもう一つの過去が由希の胸裏を締めつける。彼女の両眼は無意識のうちに泪でいっぱいになった。

大学に入り、由希は高校時代やっていたトランペットをやめてしまった。入学式の直後、校内の広場で勧誘されたせいもあって、演劇サークルに入った。新入生を迎える学生等の笑顔も満開の桜の樹とともに満ち溢れ、彼女は華やかな女子大生としてのデビュー^{トキ}を飾ったつもりであった。しかし、甘く映えたその瞬間^{トキ}の現実^{トキ}は、フォークを差したのち脆くもクリームにまみれ皿に落ちたショートケーキの苺のように、早くも崩れかけてゆくのであった。

「もつと滑舌よく発声しなきゃ駄目でしょ」

「台本の中のセリフちゃんと覚えてきたの？」

サークルとはいったものの、部活動のような手厳しい毎日が続くこととなった。

演劇について、演技などとりわけ習った事のなかった由希は、あまり自信なさげな顔つきでいたためか、懸命に稽古に励もうとする先輩達の眼にいつの間にか纏わり付く存在となってしまうたのであった。他に入った人でも全く一からのスタートというのも少なくなかったが、下積みでの演技の練習は、慣れていない彼女にとって有意義なものになるどころか、かえって不安とストレスが溜まってしまいう事となった。

「最近、わたしトランポリンにハマっててえ」「ええ、理奈子マジでえ」

「これが寝る前とか楽しいんだよ、けっこう。友美も一度やってみればあ」

サークルが終わって同い年の友人達と帰りにファーストフードで会話をしているも、表面では皆に合わせて笑顔を交わし取り繕っていたが、内心はもう一人の辛い自分が泣いていたのであった。由希はこのままサークルを継続する気持ちにはなれず、後期が始まる十月前に辞める事を決意した。それからというもの、学校も日常生活も味気ない、生温いミルクティーのような気分が続いてしまう毎日となった。彼女は英米文学を専攻していたが、大学の形式だけの気怠い講義に意欲が湧いてこなかった。たまに休日バイトを始めても長続きしない。（もうやめたい…何もかも）

失望感と憂鬱な気持ちの日が経つにつれ徐々に募っていった。そしてついに、二年生になってまもなく由希は大学をも辞めてしまった。

それからだ。彼女の墮落した一歩が暗い影を落とし始めたのは…。

「由希、わたしとお父さんの言ってる事が聞けないの？」

「お願い、行かせて」

由希はその後、両親の反対を押し切り、田舎の県外へと一人飛び

出ていった。しかし、手元の懷も彼女の冷めてしまった心と同じく温かくなかった。週末の夜、無数のネオンがいたずらにチカチカする繁華街を人込みに紛れていると、

「姉ちゃんエエ女やな。俺いまヒマなんや。ちょいと遊ばんか」
突然背後から、茶髪でアロハシャツの派手な服装をした若い男が由希に声を掛けてきた。思わず声も出ないほど呆氣に取られたが、とにかく退屈でほとんど何もすることができないでいた彼女は、ほんの僅かのあいだ躊躇った後、その若い男の誘いに乗ってしまった。これが、チンピラの早次郎との出会いであつた。

「わあ、波に乗れるのってなんか快感」

「そうそう、上手いじゃん、由希イ」

早次郎は競馬やパチンコなどの低俗な趣味以外にも、サーフィンやスノボなどアウトドアでも彼女を一時でも楽しませようとしてくれた。

「初心者コースもう慣れたから、次は中級コースで滑ろうつと」

「やるじゃないか、由希。その調子、その調子イ」

ひとはどう変わってゆくのかわからないものである。去年の鬱憤ともいえる気持ちを晴らすうとでもするかのように、由希は早次郎との二人の時間に染まっていった。嬉しいトキも悲しい時も、彼女は知らず知らずのうちに若いチンピラの男と一緒にあつた。

だが、その由希にとって幸せと思える時間もそう長くは続かなかった。ある日の夕暮れ、彼女が買い物から帰ってくると、某消費者金融からの督促状が郵便受けに入っていた。

（何だろう、これ。まっ、まさか…）

彼のギャンブルで費やした借金が予想以上に嵩んでしまっていたのであつた。生計が徐々に危うくなり、由希はバイトをしなければいけなくなつた。

「お姉さん、もっと丁寧パックに包みなさいってさっき言つたでしょ」

「すみません」

しかし、何をしても覚えるのに人一倍時間が掛かってしまう由希はどこもまともに勤まらなかった。

「また、クビになったんかい。アホちゃうか、お前」

チンピラの若い男はいえ、そんな彼女の情けない態度に腹を立て、八つ当たりするようになってきた。

（早次郎だつてほとんど何もしてないくせに…バカ）

汚い畳の上に張り倒された由希は、心の中で、そう言い続けた。

仕方なく由希はパソコンを使った裏稼業で身を立てるようになっていった。がしかし、そんな醜い魂に釘が少しずつ刺さっていくかのように、早次郎との仲違いの時間も増えてきて、徐々に精神的に追い詰められてゆく。

そんな悶える日々が続いていたとある日の夕方、いつものようにコンビニに行くと背の高く眼鏡を掛けた、自分と同年くらいの若い青年が雑誌を立ち読みしていた。ふと視線が合った瞬間、由希はどこか見覚えのある顔に暫しのあいだ、彼を見入っていた。

「もしかして、し、俊也？」

「えっ、そうだけど。…誰、だっけ？」

「わたし、由希だよ。ほら中学まで一緒だったじゃん」

「あっ、由希か」。久しぶりイ。少し変わったなあ、お前。今何してんの」

「あたしね、実は……」

コンビニを出てから、俊也に彼女は今の全ての事情を話すと、彼は由希の現状の辛い心境を受け止めてくれた。

「そうか。そりや大変だな、由希も。この俺が何とかしてあげたいな。番号とアドレス教えとくから、いつでも電話やメールしてくれよ」

「俊也 ありがとう」

この奇遇な出逢いがあってから、運良く一週間も経たないうちに早次郎には別の女ができ、チンピラの彼と共に同じ時を過ごしたのは昨日の夜が最後であった。

…そして今、彼女は薄暗い電灯の下で早次郎と過ごしてしまった二年半の穢れてこびりついた垢を擦り落とすかのように、あくせくと荷物をまとめあげている。

“ピンポン”

呼び鈴が鳴ると、彼女の身体はゾツと小刻みに震え出す。またあのチンピラの男が舞い戻ってきたのではないかと、無意識のうちに不安に駆られてしまう。

だが、月夜に照らされてアパートの前に現れたのは紛れも無い、俊也であった。由希は前もってメールで、彼に住所を伝えておいたのであった。

「明日からは俺と一緒にの生活さ。もう何も心配することなんかないよ」

「う、うん」

由希は幾分照れながらも、俊也の表情をまじまじと見つめた。未だ見えないふたりの未来を、そつと胸に秘めながら

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2690f/>

ブローケン・スプリング

2010年10月16日04時01分発行